

善通寺組が行く、入部、最初の大川山

埋忠洋一(5回生:(2018.1.12 受理)

いつとはしれず長くなった人生だが、振り返ると、あの頃は輝いていたと思えるときが幾度か存在する。その時々で輝きは異なるが、すべての輝きにおいて共通したものがある。それは僕の場合、悦び感受しながら、ひたすらひとつのこと打ち込んでいたことだろう。

とりわけ大手前時代の6年間は、いまだに強い光を放ち続けている。ことに勉強をしたわけではない、成績が良かったわけでもない。それでも、その6年間には特別な輝きがある。その輝きもたらしてくれているのは、幸運にも大手前に入学し、和気先生に出会い、生物部仲間たちとひたすら蝶に向き合うことができたからに違いない。

和気先生と生物部の仲間たち、共に蝶を追い、植物を探し、自然と触れ合い、山に登ったことなど、それらのすべてが、僕の人生における原風景を生み出してくれた。いや、とても、それだけに止まらない。さまざまな経験を積み重ねてきて理解できたことであるが、先生と仲間たちとの6年間は、人生の諸相において、面白さと未知なるものへの探求を絶えず織りなしてくれたように思う。

善通寺組が行く

当時を思い起こしてみよう。善通寺の小学校から大手前に入学した5回生は、僕のほか、臼杵浩志くん、三原淑臣くん、本条征史くん、横川一紀くんの5人である。横川君を除く4人は、生物部に入り、共に活動することになる。入学後日ならずして、和気先生から生物部への入部の案内があった。その勧誘に直ちに反応したのは、臼杵くん、三原くん、僕の3人。いずれ劣らぬ昆虫好きである。入部を希望した3人は、その日のうちに和気先生の部屋を訪ねた(本条君はたしか、2年生になってから入部)。小さい殺風景な部屋だったが、雑然としている印象があり、不思議な雰囲気漂っていたような記憶がある。そのとき感じたかすかな違和感は、今でも何かのはずみに記憶として蘇る。

5回生(昭和29年に入学)で生物部に入ったのは、善通寺出身の4人だけであった。1年上の横山さんも善通寺(東部小学校)の出身だから、その当時の生物部員はほとんどが善通寺組ということになる。因みに当時、生物部の部長は、秀才の誉れ高い1年上の原田さん(丸亀出身)であった。善通寺組は通学には電車(琴電)を利用していたが、季候の良いときなどは自転車で通うことも多かった。銀輪を光らせ、一塊になって疾走する善通寺組の姿は、大手前の制服が目立ったこともあって、ずいぶん人目を引いたらしい。

和気先生も通勤にいつも自転車を使っていたので、ときどき通学時や帰宅時に会うことがある。そのような時、和気先生を先頭に善通寺組が連なって走る光景は、まるでカルガモの親子のようである。走るにつれ、しだいに文字どおりの疾走になるのが常だった。

先生は気が向けば、曲乗りを披露してくれる。ここは横山さんの文章に詳しいが、和気先生は自転車をまるで自分の体の一部のように自在に操り、乗ったままバランスよく停止し、いつまでも

倒れない。誰もまねができない。そのような僕たちを見て、先生は得意げで、なにか誇らしげである。和気先生のその技を見ただけで、先生に憧れを抱くことができた。先生は善通寺ではないが、自転車で通う善通寺組の皆にとってボスだと感じられる存在だった。

生物部の歴史において、おそらく類をみない熱量で活動した狂気の集団、善通寺組について記憶を辿りつつ記してみたい。

<ボス和気先生、生徒募集に奮闘する>

当時の大手前は、卒業生がまだいない、生まれたばかりの学校である。多くの人たちにとって未知の学校だけに、優秀な生徒を集めるのは困難を極めたに違いない。そのような状況における唯一の募集方法は、倉田校長の夢を乗せて進もうとする大手前を、生徒たちにストレートに伝えることだろう。おそらく、和気先生はそれができたし、そうしたのだと思う。教育と研究にかけると同じ情熱をもって、不器用に、いや十分に器用にそれを実践して、多くの生徒を大手前に入学させたに違いない。

<臼杵くんのこと>

和気先生は生徒募集のため善通寺東部小学校を訪れたとき、生徒たちに持参したスライドを見せたという。そこには、儂くも美しい、天女のようなアサギマダラの姿があったらしい。臼杵くんはそのスライドを見た瞬間、アサギマダラに魅了された。それは、まさに電撃的なものだったようである。

たしかにアサギマダラが飛翔する様は、まさに天上から舞い降りる天女である。臼杵くんはアサギマダラに出会いたい一心で、大手前に入学したというのだから驚く。このような志望動機による入学者は、大手前において間違いなく唯一無二であろう。ところで、夫人との馴れ初めはどのようなものであっただろうか、いささか興味をそそられる。おそらく夫人は、臼杵くんを一瞬にして虜にしたアサギマダラのような人ではなかろうか。

和気先生のもと臼杵くんが蝶に駆けた一途さと純粋さは、今なお、羨ましいほど変わらない。このカエルの会の発足とその後の活動のすべてが、このような臼杵くんの使命感と努力に依るものである。

<三原くんのこと>

三原くんは、善通寺中央小学校でも僕と同じクラスであった。日常的に自然に親しんでいた三原くんにとって、大手前では生物部に入ることは至極当然なことだったと思う。振り返ると、自然や生物が大好きというだけではなく、とにかく詳しいのだ。それだけではない、自然に溶け込んだかのように、よく自然が似合うというのが当時の三原くんの印象である。

日々の行動においては、僕と甲乙つけがたいほど遊びが好きである。とにかく遊びと昆虫採集には夢中だが、勉強にはまったく興味が沸かないのも僕と同じだった。これは僕の印象だが、いささか三原くんには失礼な言葉かもしれない。臼杵くんも含めた 3 人にとって、ひたすら蝶を追い、蝶に対する興味を深めることが大手前時代のすべてだったと思う。

かなり後の話だが、三原くんの思想にふれて驚いたことがある。僕もずっと同じような考えを抱いていたからである。遊ぶこともなく、もちろん蝶を追い求めることもなく、真面目に勉強をしている同級生たちを評して、「かわいそう。遊びの面白さを知らないのだよ」と、心からそう思っているように呟いたのだ。「ほんとうに遊びの面白さを知ってしまったら、勉強はできないだろう」と返した会話は、不思議に今も記憶に残っている。

だが、三原くんの蝶にかける情熱が、高校2年生頃から少しずつ薄らいでいくように感じたのは僕だけだろうか。別に、勉強に目覚めたとは思えない。彼の自然への情熱の対象が、蝶からアウトドアでの遊び、海とヨットに少しずつ向かっていったのかもしれない。むしろ、多くの遊びの体験を通して、興味の対象が広がったのだろう。

<本条くんのこと>

本条くんは、たしか中学2年の春になって入部したと思う。先に入っていた3人はすっかり蝶に夢中になっていたので、通学の行き帰りには蝶の話ばかりをしていたし、休みには3人揃って蝶を求めて山に通っていた。おそらく本条くんにも3人の楽しそうな様子が伝わり、蝶に対する興味が沸いてきたのだろう。さらに、普段も善通寺組は仲が良かったので、もっと一緒に行動したいと思ったのかもしれない。

本条くんが入部して善通寺組(5回生)は4人になり、その活動は一段と活発になる。そのような状況でも、本条くんは学校の成績が良く、勉強と善通寺組の活動をバランスよく保っていた。賢明なことに、蝶狂いとの一線を踏み超えないようにしていたと思う。その点は、3人の蝶狂いとは大違いである。だが本条くんはまともであったが故に、狂ってこそわかる、蝶に夢中になることの面白さは十分に味わえなかったかもしれない。

最初の採集旅行、大川山

入部して最初の活動は、その直後の5月の大川山における採集であったと思う。和気先生と5、6名の部員は、授業を終えた土曜日の午後、自転車で大川山に向かった。登山口に到着すると、その近くの雑貨屋らしい店のそばに自転車を置いて、そのまま山頂を目指した。

1,000メートル級の山に登るのは、初めての経験である。小さな体に重い荷物を背負い登り始めたが、山頂までの道のりは想像以上に長い。道半ばで日が落ちると急速に暗くなり、すぐ前を登る者の姿も見えなくなる。疲れが限界に達してから30分余り歩いたのだろうか、深い闇の中、山頂の神社のそばにある小屋にたどり着いた。

翌朝目覚めると、そこには眼下一面に広がる雲海、冴え渡る空気と静謐さが待ち受けていた。母体から生まれ出たばかりの子供が、胎内とはまったく異なる世界に触れた一瞬は、このような状態なのかもしれない。この感動の瞬間から、蝶と山は一体となって僕の体の奥深くに住みついてしまい、その後の人生に直接的に間接的に影響を及ぼすことになる。

朝食もそこそこに捕虫網を持って小屋を飛び出したが、蝶の姿はほとんど無く、悄然としてしまう。山頂近辺での蝶の採集には、時期が少し早すぎたのだろう。しかし、そのようなとき、郭公(カッ

コウ)の爽やかな鳴き声が、深い静寂さのなか絶妙の間合いで山中に響き渡る。

気温が上がってきたのか、蝉らしい鳴き声がわき上がる。少なくとも 30、40 匹以上いたのだろう、さながら合唱である。蝉にしてはあまりにも時期が早い。その声の主を探し求めると、ツクツクボウシに似た透明の羽を持つ蝉を見つけた。5 月にこんな標高の高い山で、蝉に出会うとは、当時の僕にはまったく想像できないことだったのである。そのとき、和気先生から、その蝉が春蝉という名前で、5、6 月頃に出現することを教えていただいた。高い山に春の訪れを告げる蝉にふさわしい名前だと強く印象に残り、その後、春の山ではいつも春蝉の鳴く声を意識しながら歩いた。

もう一つ初めて経験したことで、くつきりと記憶に残っていることがある。時折、カンカンカンと澄んだ甲高い音が全山に響き渡るのだ。その音のテンポは、機関銃の連射音のように速い。何の音なのか、いくら考えても判らない。和気先生に伺うと、音の主がキツツキであり、枯れ木の幹をくちばしで叩くことによって発生すると教えられた。

下山しながら蝶や植物の採集を行う。その日は絶好の採集日よりだった。先生は時々、珍しい植物や、風変わりな植物に出会うと、立ち止まり、その名前や特徴的なことについて熱心に伝授してくださる。そのときの和気先生は、いかにも植物が愛しくてたまらないという様子だったし、部員の皆にも好きになって欲しいという気持ちが溢れていた。だが、僕は活動的で華やかな蝶に比べると、植物はいささか地味な印象で魅力に欠けるように感じてしまう。そのためか、教えていただくことが、蝶のようにはすんなりとは頭に収まらない。和気先生には申し訳ないと思いつつ、植物の採集はなんとなく自分には向いていないような気がした。

明るい日差しのなか、山を下るにつれてしだいに蝶の姿が数を増し、少し開けたところでは多くの蝶が花々に吸い寄せられるように集まっている。山麓ではすでに春が深く、初めて見る蝶も多い。皆がいつせいに捕虫網を振り回し、夢中になって追いかける様子は忘れられない。この楽しさは何だろう。そのとき、早い青春の始まりを予期させる、誰も止めることが出来ないほどの大きな幸せを感じていた。

話はそれるが、先日、元生物部員や生物好きが集まり、大手前時代を追想する機会があった。そのとき、1 回生の吉井さんから「蝶の採集には狩猟(と言ったらよいもの)と研究とがあるが、僕は研究よりも狩猟が向いているし好きだったと思う」と昔を懐かしみながら語られた。

この言葉にまったく同感である。大川山の蝶を追いかけたときに感じた楽しさと幸せ感は、人間(特に男)に存在する狩猟に関係した DNA に組み込まれたものに違いない。だから、あれほど夢中になれたし幸せを感じたのだろう。

ここまで書いてきて、この大川山で使った補虫網のことが唐突に気になりだした。そこで、記憶を辿っていくと、思いも寄らない事実が、埋もれた記憶の中から蘇ってきた。その時の補虫網は、自分で作った手製のものだったのである。当時、善通寺では補虫網は手に入らず、この大川山登山のときは入部して間もないでこともあって困った。そこで急遽、母のナイロン製のストッキングを取り出してきて、作りあげたのが最初の補虫網である。

かなりスリム、ちょっと変わった色合い、くつきりと足の形を残した補虫網。こんなストッキングで作った補虫網を振り回すのだから、母はずいぶん恥ずかしい思いをしたに違いない。僕もなんとな

く恥ずかしさは感じたのだが、蝶を追う魅力の前にはさほど気になることはなかったのだと思う。

初めての大川山での採集には、このストックング製の捕虫網を持って参加した。和気先生が僕の捕虫網を見たとき、その表情が微妙に変化したのを覚えている。その後しばらくすると、僕は真っ白な新しい捕虫網を手に入っていた。どのような経緯でその捕虫網を手に入れることができたのか、はっきりとは思いだせない。だが、当時の諸状況から推測すると、和気先生が手配してくれたものだったと確信している。

和気先生は僕の捕虫網を見て、何とかしないとイケないと思ってくれたのだろう。母のストックングで手作りした捕虫網の一件を思い出すままに書き綴っていて、当時はこんな時代だったのか、和気先生はこのような人だったな、僕はこういう人間だったな、今も変わらないな、と、当時から今へと思いを馳せてしまう。

この最初の大川山行きで出会った蝶は、30種類近くに上ると思う。珍しい蝶ではないが今も記憶に鮮やかなのは、華やかな大型の蝶のカラスアゲハ、オナガアゲハ、モンキアゲハ、アオスジアゲハ、アサギマダラなど、色合いが特徴的なルリタテハ、アカタテハ、コムラサキ、アオバセセリ、形体や名前に特徴のあるテングチョウ、イチモンジチョウ、コムスジ、イチモンジセセリ、ダイミョウセセリなどである。これらの蝶の名前は、そのときに和気先生から教えていただいた。

おわりに

その後、善通寺組は1学年上の原田さん、横山さん、横田さんなどに続いて、蝶の世界、植物の世界へとめり込んでいくのだが、それを決定的にしたのはこの最初の大川山への採集旅行であったことは間違いないだろう。

今考えると、当時、和気先生はとても若かったし、おそらく自らの研究や生徒の教育に対する気力が充溢していたのだろう。そこに活力の溢れた5回生が加わったこともあって、生物部は生き生きとした活動が続けられていく。

書き記しておきたいことが想像以上に多く、ページ数も嵩み過ぎたので、その活動については稿を改めさせていただきたい。